

ササ林床におけるメジロの営巣特性について

○ 中村秀哉(常磐大学)、東條一史(森林総合研究所)

茨城県筑波山において鳥類の個体群動態と繁殖生態について調査を行っている。調査地は山頂付近のブナ・ミズナラ林を中心に、中腹のクリ・コナラ林、アカマツ林、スギ・ヒノキ林にあたる。

調査地の最優占種は帰化鳥のソウシチョウであるが、既存の日本産鳥類ではウグイスの優占度が最も高い(1994年鳥学会)。調査地内ではメジロの優占度は低いものの、全域にわたり出現し、平地でも一般に見られる。これまで愛玩用としてもよく飼育されてき、一般に樹木に営巣されるとされるが、その生態は詳しく調査されたことがない。

本調査地ではこれまでに、メジロがササ類のスズタケに営巣することが分かった。1991年から2005年に確認されたメジロの巣は10個で、その内産卵あるいは雛がいたのは6巣あった。産卵数は4か5卵で、雛で見つかったものは同じであった。卵・雛のいる巣はいずれも、4・5・6月に集中した。

スズタケに営巣する場合、地上高は142cm (SD=28cm)で、筑波山でササ類に営巣するソウシチョウやウグイスに比べ、高い位置に営巣している。7月以降のスズタケにおける営巣および、樹上営巣はこれまで見つかっていない。

茨城県北部でも、ササ類に営巣する例が見つかっており、ササ林床を持つ環境ではササ類に営巣することは一般的であると考えられる。

メジロは平地では中高木に営巣するが、樹木の少ない公園などでは地上2mほどの低木にも営巣することがある。このメジロのササ類に営巣する特性について、若干議論する。

